

為家七社百首における漢籍の影響

| | |
|-----|---|
| 著者 | 福留 瑞美 |
| 雑誌名 | 國文學 |
| 巻 | 99 |
| ページ | 39-52 |
| 発行年 | 2015-03-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/9237 |

為家七社百首における漢籍の影響

はじめに

『為家七社百首』は、先例の『俊成五社百首』にならって成立したもので、七社（伊勢・石清水・賀茂・春日・日吉・住吉・北野）への堀河題による奉納百首である。その成立事情については「国文学」第九十八号（拙稿「為家七社百首」の祈りの系譜・二〇一四年三月）において述べた。今回は、拙稿「俊成五社百首における漢籍の影響」（『和歌文学研究』第百八号・二〇一四年六月）との比較のため、『為家七社百首』¹における漢籍の影響について典拠やその摂取方法を確認していきたいと思う。

福留瑞美

一、漢籍影響歌の出典

本稿でいう漢籍の影響とは、明らかに出典がわかる和歌だけではなく、はっきりとした典拠はないが漢籍の世界で使われていた比喩表現や発想を和歌に取り入れているものも含めている。例えば、

①夜半に吹く川風寒み置く霜に光重なる冬の月影（賀茂⁴²霜）とある傍線部「置く霜」の白さに月光が「重なる」という表現について、白詩に「風吹枯木晴天雨 月照平沙夏夜霜（風枯木を吹けば晴の天の雨 月平沙を照らせば夏の夜の霜）」（和漢朗詠集・夏夜・一五〇・江楼夕望）「葉声落如雨 月色白似霜（葉声は落ちて雨の如く、月色白くして霜に似たり）」（秋夕）とあるように、月光の明るさを霜の白さにたとえる漢詩表現は多く、

それを前提として和歌①は詠まれている。つまり和歌①は漢詩的発想による表現を取り入れたものである。本稿ではこういった和歌をも含めて漢籍影響歌とする。

『為家七社百首』（以下、『七社百首』とする）において漢籍の影響を受けていると思われる和歌は、全体の十パーセントにも満たず、『俊成五社百首』より少ない。その出典については「礼記」「詩経（毛詩）」「文選」「玉台新詠」「白氏文集」「和漢朗詠集」「新撰朗詠集」「世俗諺文」「法華経」などである。原典から直接というものもあるが、中には注釈書や類書または和歌の伝統や慣用句になっていたものなどからの間接的な摂取もあると思われる。以上の出典をもとにして他の歌人も詠んでいることから、当時の基本的資料に基づいていると言える。また摂取方法としては単語レベルの摂取、漢詩的な比喩表現や発想の摂取、本説取りなど様々である。次の章段からはそれらを具体的に摂取方法を確認していく。

二、パターン化された季節表現

季節題が主な構成要素である堀河題（春二十首・夏十五首・秋二十首・冬十五首・恋十首・雑二十首からなる百題百首）を

詠むためには、実際の季節に反した季節の景物や変化を詠まなければならない。そこで固定化された季節に対する観念で詠まれることになるのであるが、その基盤になるものとして「礼記」月令、「詩経（毛詩）」における季節表現がある。まず春部には、

② 水上に氷とくらし五十鈴川神代にかへる春の初風

（伊勢1立春）

③ きのふまでむすぶ水の石清水けさうちとけて春風ぞふく

（石清水2立春）

④ たちかへるその神山の春風に御手洗川は氷とくらし

（賀茂3立春）

⑤ 朝氷とけにしままに唐崎や浦波かけてかへる雁金

（日吉89帰雁）

⑥ 春にあふ御世の恵みにさそはれて残らずいづる谷の鶯

（石清水23鶯）

とあり、和歌②～⑤は「礼記」月令・孟春之月の「東風解冻、蟄蟲始振、魚上氷、獺祭魚、鴻雁来」を意識したものであり、和歌②～④は「東風解冻」、和歌⑤は「解冻」と「鴻雁来」を用いている。和歌⑥は「詩経（毛詩）」鹿鳴之什・伐木の「出自幽穀、遷于喬木」に拠っている。次に秋部には、

⑦ 初雁の山飛びこゆる朝より木木のこずそぞ色ことになる

(賀茂304初雁)

⑧色かはる木の葉を見れば佐保山の朝霧隠れ雁は来にけり

(春日305初雁)

⑨神も見よ涙は知るやきりぎりす昔の袂の露の深さを

(石清水359虫)

⑩思ふらん心ぞ知らぬきりぎりす老の寢覚に鳴きかはせども

(春日361虫)

⑪老いらくの床の辺りのきりぎりすたれかまさるとなかぬよ
もなし

(北野364虫)

とあり、和歌⑦⑧は『文選』巻四十五・漢武帝「秋風辞」に「秋風起兮白雲飛 草木黃落雁南歸」(善曰、礼記曰、季秋之月、草木黃落、鴻雁來賓)とある部分の影響により、紅葉と初雁を組み合わせて詠まれていると思われる。和歌⑨⑩⑪は「詩経(毛詩)」「幽風・七月に「十月蟋蟀、入我床下」を意識したものである。

⑫たをやめの柳の露の玉かづら長き日かけてけづる春風

(伊勢50柳)

和歌⑫は「和漢朗詠集」の摘句(表1参照)をもとに万葉語を使って表現されているが、「長き日かけて」という部分は「春日が長い」という概念に基づいて詠まれた表現である。曆上で

は夏至が最も日中が長い(「礼記」月令・仲夏に「是月也、日長至」とある)にもかかわらず、なぜ「春日が長い」とするのか。

和歌においては、「相思はぬ妹をやもとな菅の根の長き春日を思ひ暮らさむ」(万葉集・一九三四)「ちりぬべき花見る時は菅の根の長き春日も短かりけり」(拾遺集・春・五七・藤原清正)など「万葉集」以降詠まれており、確かに和歌の伝統に根付いた表現かもしれないが、もともとは漢籍由来の概念と思われる。

『詩経(毛詩)』に「春日遲遲、卉木萋萋」(小雅・鹿鳴之什・出車)「春日遲遲、采繁祁祁」(幽風・七月)とあり、この表現を受けて多くの詩人が詠んでおり、「万葉集」巻十九・四二九二左註でも触れられ、白詩にも「春日遲、日遲独坐天難暮、宮簷百轉愁厭聞」(新樂府・上陽白髮人)「遲遲兮春日、玉筮暖兮温泉溢」(新樂府・驪宮高、和漢朗詠集・蟬・一九二)「館娃宮深春日長 烏鵲橋高秋夜涼(館娃宮深くして春日長し 烏鵲橋高くして秋夜涼し)」(送蘇州李使君赴郡二絕句)など多い。

このように「礼記」月令や「詩経」を踏まえた和歌は非常に多く、和歌の伝統的な考え・当時の固定概念になっていると思われるが、もともとは漢籍に由来するものと言える。奉納和歌である「七社百首」においては、それらを用いて奉納先とゆかりのある地を組み合わせることで、その地で滞りなく季節が循

環することを示し、儒教的な概念において季節の循環を支える神を讃えるものとして利用していると思われる。

また、「七社百首」所収の「伊勢社百首」では、天皇家ゆかりの神・皇祖神への奉納という意識が強く、

⑬世をめぐみ民はぐくむうるひとて山田の原は春雨ぞ降る

(伊勢71春雨)

⑭苗代の山田の民の苦しさをかへすがへすも君は育め

(伊勢99苗代)

⑮いにしへを思ふにつけて藤の花心にかけて恵みをぞまつ

(伊勢120藤)

⑯いかばかり神のためにと早苗とる民の力をあはれとが見る

(伊勢176早苗)

⑰曇りなき日影にむかふ葵草かけて天照る世をたのむらし

(伊勢155葵)

など、君・臣・民を意識した和歌が詠まれている。和歌⑬「春雨」は、例えば「文選」巻七・楊子雲「甘泉賦」に「雲飛揚兮雨滂沛、于霄德兮麗万世（善曰、言恩沢之多、若雲行雨施、君臣皆有聖德、故華麗至于万世也。）」とあるように、君徳を雨に譬えるという儒教的思想によった表現である。和歌⑰「日影に向かふ葵草」は唐葵のことで、「傾心比葵橙 朝夕奉堯曦（心を

傾けて葵橙に比し 朝夕に堯曦を奉らむ）」（李嶠百二十詠・日）とあるように、君主の徳に心を傾ける臣下の喩えとして用いられる。

以上見てきた和歌は、「詠歌一体」に言うところの「地歌」に当たると思われ、地の文のような目立たない和歌であり、パターン化された表現を取り入れることは新鮮みに欠けてしまうということにもなりかねない。しかし、奉納百首において神社ゆかりの歌枕と滞りのない季節の循環を組み合わせることで、儒教的概念を基にして、それを支える神を讃えるという意図があったと思われる。「俊成五社百首」よりも神社ゆかりの歌枕を多用する「為家七社百首」では、いつそういつた性格が強いと言える。その上、「七社百首」所収の「伊勢社百首」では皇祖神への奉納ということが強く意識された結果、君徳を求める儒教的な表現が他の百首よりも多くなっている。

三、「和漢朗詠集」の摘句の撮取方法

次頁の表1に示したとおり「七社百首」には「和漢朗詠集」を典拠とする和歌が存在する。「七社百首」の漢籍影響歌における出典については、「俊成五社百首」の場合と同様に、「和漢朗

表1 「和漢朗詠集」の摘句を典拠とする和歌

為家七社百首

出典 (和漢朗詠集)

(算用数字は新編国歌大観番号、*は「藤原為家研究」に指摘があるもの)

| | |
|--------------------------------------|------------------------------------|
| たをやめの柳の露の玉かづら長き日かけてける春風 (伊50柳) | 気霽風梳新柳髮 水消浪洗旧苔鬚 (早春13都) |
| *片岡の朝の原の雪間よりもうくもゆる春の早嵐 (伊57早嵐) | *紫塵嫩蹠人拳手 碧玉寒蘆雞脫襪 (早春12小野董) |
| *雲かかかる朝日の影ははれやらでなほ窓暗き春雨の声 (賀73春雨) | *斜脚暖風先扇処 暗声朝日未晴程 (雨84保胤) |
| 立ち返りとまらむものか行く春のやや暮れかかる藤の下陰 (石135三月尽) | *耿耿残灯背壁影 蕭蕭暗雨打窗声 (秋夜23上陽人白) |
| けふは又いつくの関に尋ぬともしばし止まる春はあらじを (北140三月尽) | 惆悵春婦留不得 紫藤花下漸黃昏 (三月尽52白) |
| 朝はらけ池の蓮や咲きぬらん小簾の間通る風にほふなり (日22蓮) | 葉展影翻当砌月 花開香散入塵風 (蓮176白) |
| 吹きしをる風にくたく紫の色むつまじき藤袴かな (住293藤袴) | 關憲苑風摧紫後 蓬萊洞月照霜中 (菊271萱三品) |
| おのづから一日をおのが盛りとや陰に隠れて残る朝顔 (石331蓮) | 松樹千年終是朽 槿花一日自為榮 (權291放言詩白) |
| 宮人のあか月起きの露の間にあしたを飾る朝顔の花 (北336權) | 佳人尽飾於晨粧 魏宮鐘動 遊子猶行於残月 函谷鸛鳴 (暁416賈嵩) |
| たをやめの飾る朝のよそほひにまづあけてける玉櫛笥かな (賀563暁) | |
| 鳥の音に誘はれ出でし面影の恋しき旅になくなくぞゆく (賀535旅恋) | |
| 松ならぬよそのもみちも一夜にぞ北野の杜は色づきにける (北378紅葉) | 三秋岸雪花初白 一夜林霜葉尽紅 (霜368温庭筠) |
| 霜雪に遠きみきは埋もれて水の下によする細波 (日439水) | 水封水面閑無浪 雪点林頭見有花 (水付春水 384菅) |
| 浦波のかよはぬほどやこほるらん松風寒き住吉の池 (住440水) | |
| 暁の老の眠りよいかにしてこのたび夢を覚まし果てまし (伊591暁) | 老眼早覺常殘夜 病力先衰不待年 (老人724白) |
| 和歌の浦の蘆辺のたづの夜の声聞こえ上げても跡をたがふな (伊582鶴) | 第三第四絃冷々 夜鶴憶子籠中鳴 (管絃付 463五絃彈 白) |
| 子を思ふ心は知るやつたへきて世々にかさなる鶴の毛衣 (石583鶴) | |
| あるものと掲げ尽くすぞあはれなる風の前なる窓の灯火 (賀675無常) | 夕殿螢飛思悄然 秋灯挑尽未成眠 (恋782長恨歌 白) |

詠集」が一番多い。それは、堀河題という題自体が「和漢朗詠集」の影響もあり、堀河題と同題で集められた詩句や和歌を検索しやすいという点や、歌人の必読書にもなっていたという点にあると思われる。また、撰取の方法については、語彙レベルの撰取から、上下句のどちらかを句題にして詠んだもの、摘句全体の内容を踏まえて詠んだもの、二種類の詩句を利用したもので、様々な試みがなされている。

⑱松ならぬよその紅葉も一夜にぞ北野の杜は色づきにける

(北野378紅葉)

和歌⑱「松ならぬ」とあるのは、「八雲御抄」第三枝葉部・木部・松に「おい北野。一夜同。」とある北野社ゆかりの「一夜松」を想定した表現である。一夜松については、「扶桑略記」天曆九年三月十二日「天満天神託宣記」に「近江国比良宮にして欄宜神良種が男太郎丸、年七歳なる童に託て宣く一略一右近の馬庭こそ興宴の地なれ。我彼の馬庭の辺に移居む。但至らむ所には松生ずべし」とあり、「北野天神縁起(建久本)」には「一夜の中にぞ数十本の松は生出て、たちまちに数歩の林とぞなりにける。神雲眼にみえて万人の植えたるがごとくなり」とある。したがって和歌⑱は、北野社ゆかりの「一夜」に生えたという松に対し、同じ「一夜」が使用された詩句「三秋岸雪花初白 一

夜林霜葉尽紅(三秋の岸の雪は花初めて白し 一夜の林の霜は葉尽く紅なり)(和漢朗詠集・霜・三六八・温庭筠)とある表現を媒介として、北野の杜にある紅葉も一夜にして色付いたというのである。

⑲朝ぼらけ池の蓮や咲きぬらん小簾の間通る風にはふなり

(日吉222蓮)

これは「葉展影翻当砌月 花開香散入簾風(葉展びて影翻る砌に当たる月 花開きては香散ず簾に入る風) (和漢朗詠集・蓮・一七六・白、千載佳句・草木部・蓮、白氏文集・階下蓮)に拠っている。詩句の下の句を「小簾の間通る風にはふなり」と表して、その香により「蓮や咲きぬらん」と今気づいたとする。和歌⑲は、おそらく同じ摘句を意識して詠まれたと思われる俊成の和歌「蓮咲く池の夕風にはふなり浮き葉の露はかつこぼれつつ(俊成五社百首・春日社・蓮・二三二)をも意識していたのではないだろうか。そして和歌⑲「小簾の間通る」という表現はいわゆる万葉語であり、「玉垂れの小簾の間通し独りみて見るしるしなき夕月夜かも」(万葉集・一〇七三、古今六帖・三五六)という万葉歌に拠る表現であるが、歌意とは直接関係はない。このように万葉語を使用して漢詩句の内容を表現するという方法は、基俊(堀河百首・一五九六)や俊成(五社

百首・八) などにも見られ、そういったところから学び取ったのであろう。

⑳ 立ち返りとまらむものか行く春のやや暮れかかる藤の下陰
(石清水135三月尽)

和歌㉔は「惆悵春婦留不得 紫藤花下漸黄昏(惆悵す春婦りて留むれども得ざることを 紫藤の花下漸く黄昏たり)」(和漢朗詠集・三月尽・五二・白)に拠っている。また為家は以前にもこの句をもとに「をしめどもけふや限りの春の日もなほ暮れかかる藤の下陰」(為家千首・一九三)と詠んでいる。いずれの為家の和歌も、摘句の「紫藤花下」という部分を「藤の下陰」と表現しているが、この表現は「春もをし花をしるべに宿からんゆかりの色の藤の下陰」(正治初度百首・一三三二・定家、拾遺愚草・九一九)という定家の和歌から学んだものと思われる。このように定家の特徴ある表現を万葉語のように詠み入れる方法、つまり(定家の表現に限らず)内容まで撰取する本歌取りではなく一句程度の特徴ある部分だけを使用するという方法は、「主ある詞」(詠歌一体)に当たりそうであるが、「七社百首」において多い詠法である。

四、「和漢朗詠集」以外の漢籍の影響

前章で取り上げたように「和漢朗詠集」を典拠とする和歌の中では、白居易の詩句が多く撰取されている(表1参照)。いずれも為家より以前や同時代の歌人にも撰取されている詩句であり、時代の傾向と思われる。また、「七社百首」には「和漢朗詠集」に取られていない白詩を本説にした和歌も存在する。

㉑ 江に浸す半ばの月に声すみて荻吹く風の秋ぞ悲しき

(住吉300荻)

この和歌については、佐藤恒雄氏が「藤原為家研究」(笠間書院・二〇〇八)において白詩「琵琶引」の世界を詠じたものと指摘している。その他にも白詩の世界を踏まえて詠まれているものとして、

㉒ 山賤ぢがの急ぢがく炭すす竈年をへて寒きやおのが衣ころもなるらん

(北野476炭竈)

とある和歌は、新楽府「売炭翁」に拠るものである。「売炭翁」は、炭がよく売れることを期待して、貧しい身につらい冬の到来を待ちわびながら炭を焼くも、安い値で役人に持っていかれてしまうという翁の苦難が詠まれた諷刺詩である。和歌㉒は「可憐身上衣正単、心憂炭賤願天寒(憐むべし身上衣正に単なり、

心炭の賤きを憂へ天の寒からんことを願ふ」(売炭翁)のあたりを意識して詠まれている。他にこの和歌以前に「売炭翁」を詠んだ和歌として、

㉑深山木を朝な夕なこりつめて寒さをこふる小野の炭焼き

(拾遺集・雜秋・一一四四・曾祿好忠)

㉒小野山をきりにきりつつしづのをが世に炭竈の急ぎをぞする

(久安百首・一二五二・待賢門院安芸)

㉓都には惜しみしものを初雪の消えぬをいとふ小野の里人

(林下集・一七五)

㉔炭竈に寒さをこふる人までや秋の別れを思ひわぶらむ

(寂蓮結題百首・五五)

㉕しづのをがおのがわたらひいとなみて炭積み車ゆきまするなり

(正治初度百首・一七七二・生蓮)

㉖身をしをる炭の安きを愁へにて氷を急ぐ麻の衣手

(拾遺愚草・一三六五)

㉗奥山に炭焼くしづの麻衣さえゆく霜をいとひやはする

(為家千首・五八九)

などがあるが、「心炭の賤きを憂へ天の寒からんことを願ふ」(売炭翁)の部分に注目した和歌㉑の影響により「寒さをこふる(願天寒)」という内容を和歌に詠み入れる傾向にあり、後には「売

炭翁」の「身上衣正に単なり」「晝に炭車を駕して氷轍を轆らしむ」などの表現に注目した和歌も詠まれるようになる。為家に関して言えば、和歌㉑「しづの麻衣」、和歌㉒「おのが衣」とあって「衣」に注目した表現になっており、その上、和歌㉓には「急ぐ」という表現があることから、定家詠の和歌㉑を意識していたと思われる。また、「とはすがたり」巻一には、後深草院が妹の前斎宮との宴席で今様を歌う場面(文永十一年十一月、【増鏡】第十一・草枕にも掲載)があり、そこで歌われたのが、「売炭の翁はあはれなり、おのが衣は薄けれど、薪をとりとて冬を待つこそ悲しけれ」である。つまり一二七四年以前には「売炭翁」が今様として存在していたということになるが、今様の「おのが衣」と為家の和歌㉒「おのが衣」という表現の近さがあるかがわかる。一二六一年成立の『七社百首』には催馬楽(東屋・河口・蓮田・田中の井戸)の表現を取り入れた和歌もあり、今様の表現を和歌に取り入れたとも考えられる。

㉘霜がれのみづ野の草や萌えぬらん風に嘶ゆる春駒の声

(伊勢78春駒)

㉙吹く方や北野の野辺の草若み風に嘶ゆる春駒の声

(北野84春駒)

和歌㉘㉙の傍線部「風に嘶ゆる春駒の声」について、和歌の

世界で「嘶ゆる」という表現が詠まれた例は「堀河百首」などに存在するが、「風に（よつて）嘶ゆる」という表現は為家より以前の例には見当たらない。白詩には「晨鷄再鳴残月没、征馬嘶風行人出」（生離別）「蹇驢避路立、肥馬当風嘶」（傷友）などがあり、「源氏物語」須磨巻に「風に当たりては嘶えぬべければなむ」とあるのは白詩（傷友）を踏まえた表現である。しかし、和歌②において「吹く方や北野の野辺」とあるので「北風」よつて嘶く春駒の声」という意味になることから、その典拠は白詩ではなく、「玉台新詠」枚乗の「雜詩九首」の三首目「胡馬嘶北風、越鳥巢南枝（胡馬は北風に嘶き、越鳥は南枝に巢む）」の表現に拠っていることがわかる。この枚乗の詩は「文選」卷二十九・雜詩上に作者不明「古詩十九首」の一首目に挙げられているが、該当部分が「胡馬依北風（胡馬は北風に依り）」となっているので、為家が依拠したのは「玉台新詠」のほうの本文とすることになる。また、「万葉集」卷十八・四一三二の題詞に「身異_二胡馬_一・心悲_二北風_一」（更來贈歌二首・大伴池主）、「本朝文粹」卷十三に「胡馬非北風不嘶、越鳥非南枝不巢」（齋然上人入唐時為母修善願文・慶滋保胤）とあり、早い段階から知られていた詩句である。

②頼むぞようしほの声をきく夢ももとの誓ひに思ひあはせて

（石清水681夢）

②人ごとの五つの教へ絶えはば神も仏もなにをまもらん

（石清水688述懐）

和歌②「うしほの声」は「法華經」觀世音菩薩普門品の「海潮音」、和歌②「五つの教え」は「五教」という仏教用語を訓読した表現であり、いずれも和歌において他に用例が見当たらないので為家独自の表現と言える。これらの和歌②②はともに「石清水百首」の和歌であり、石清水の祭神が「八幡大菩薩」とも称され仏教とのつながりは強いことにより詠まれた表現と言える。しかし、仏教用語の摂取は「石清水百首」に限ったものではなく、堀河題から触発されて摂取した場合もある。次の和歌②②がそれに当てはまる。

②あるものとかけつくすぞあはれなる風の前なる窓の灯火

（賀茂675無常）

この「かけつくす」については「夕殿螢飛思悄然 秋灯挑_レ尽未成眠（夕殿に螢飛んで思ひ悄然たり 秋の灯挑げ尽して未だ眠ること能はず）」（和漢朗詠集・恋・七八二・長恨歌・白）、「窓の灯火」については「五声宮漏初明後 一点窓灯欲滅時（五声の宮漏の初めて明けて後 一点の窓の灯の滅えなむとする時）」（和漢朗詠集・暁・四一九・白）「消殘砌雪心猶誤 挑尽窓灯眼

更嫌（消え残る砌の雪に心は猶誤つ 挑げ尽くす窓の灯に眼は更に嫌ふ）（菅家文章・山陰亭冬夜待月）などあるように、詩語を訓読した表現である。また、「風の前なる（灯火）」については、經典に「風中然燈」（大智度論・卷二十六）「風中灯」（大智度論・卷三十七）「風灯」（摩訶止観）「風燭」（大唐西域記）など時には略され、白詩には「況吾行欲老、譬若風前燭（況んや吾行く老いと欲す、譬として風前の燭の若し）」（帰田三首・白居易）、本朝にも「一生是風前之燭 万事皆春夜之夢（一生は是れ風前の燭、万事は皆春夜の夢）」（永観・往生講式）などがあり、いずれも散り乱れる様子や儂さを表す比喩として使用されている。和歌では「いとへども消えぬ身ぞうきうらやまし風の前なる宵の灯火」（和泉式部統集・一三四）「夢覚めてみるもはかなし山里の風の前なる灯の影」（壬三集・一六三〇・九条前内大臣家百首）などがあり、為家は参考にしていた可能性はあるが、和歌⑳は「無常」という仏教思想に基づく題であるため、仏典などで命の儂さを表す代表的な比喩表現を意図的に用いたと思われる。

㉘ 住み慣れて代々の跡ふむ和歌の浦にあらぬ声するさよ千鳥

かな

（住吉433千鳥）

㉙ 浜千鳥跡あるかたはさりととも頼むを神もあはれとは見よ

（北野434千鳥）

㉚ 池水の薄き水をふむ鴨の下の心もいかが苦しき（北野41水）
いずれの和歌にも「世俗諺文」に挙げられる漢籍表現に基づいて詠まれている。つまり、一般に定着もしくは知っておくべき漢籍表現であったものが和歌に取り入れられたものと言える。まず和歌㉚㉛は、「世俗諺文」に「鳥迹」とあるもので、「蒼頡制字」（蒙求）などにも挙げられる説話——蒼頡が鳥の足跡から文字を発明したという故事に拠っている。この表現は「鳥の跡久しくとどまれば、歌のさまをも知り」（古今集・仮名序）「遠く唐の文の道を尋ぬれば、浜千鳥跡ありといへども」（新古今集・仮名序）とあるように、勅撰集の仮名序で使用され、和歌においても筆跡・和歌などを表す表現として使用されている。「鳥の跡」という漢籍由来の表現が勅撰集の仮名序にも使用されたことにより、為家にとっては和歌や歌道家と強く結びついた表現として認識されている。和歌㉛「薄き水をふむ」について、「世俗諺文」に「履薄水」と挙げられ、「詩経（毛詩）」小雅・節南山之什・小旻「戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄氷（戰戰兢兢として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し）」に拠る表現である。

以上のように、「和漢朗詠集」以外にも様々な漢籍の影響が見

られる。その撰取方法も、和歌全体を訓読表現でまとめようとしたものもあれば、単語レベルの撰取のみというもので、実に様々である。

五、特殊な撰取方法

前章までは一首ごとに漢籍の影響があると思われる和歌を確認してきたが、この章ではそれらとは異なった撰取方法の和歌を見ていく。それは、堀河題の前後二首に渡って一つの漢籍文を撰取したもの、つまり連続する二首で一つの漢籍の世界を表現しようと試みた和歌である。

③①山城の淀野の菖蒲五月きて時にあふやと人もひかなん

(石清水170菖蒲)

③②五月とや淀の沢水せきかけて常よりことに早苗とるらん

(石清水177早苗)

和歌③①③②は、「石清水百首」の「菖蒲」「早苗」という堀河題の歌順では連続する位置にある和歌である。そしていずれも石清水八幡宮ゆかりの山城の「淀野」という設定であり、しかも「五月」という月も共通する。言い換えれば、この二首を並立させることで、同じ場所、同じ時期に菖蒲(端午)と農耕(稲作)

が行われていることを示している。これは、「文選」卷三十六・王融「永明九年策秀才文五首」に「将使杏花萋萋耕種不愆(沍勝之書曰、杏始華榮、輒耕輕土、弱土、望杏花落、復耕之、輒藺之、此謂一耕而五穫。呂氏春秋曰、冬至五旬七日、菖始生。菖者、草之先者也。於是始耕。高誘曰、萋、菖蒲、水草也)」とある「杏の花や菖蒲の葉が生じる頃に田を耕し苗を収穫する」という考えに基づいた表現である。また「李嶠百二十詠」「田」にも「杏花開風軫、菖葉布龍鱗」という表現があり、前掲の「文選」の詩文に拠っている。そしてこの「李嶠百二十詠」の下の句を句題として詠んだ源光行の和歌に、「山城の淀野の菖蒲おひにけり鳥羽田の早苗今やとるらん」(百詠和歌・二九、東撰六帖・一三二)とある。つまり光行の和歌では、「李嶠百二十詠」の詩や註の示す「菖葉が生じると耕種する」という考えに則って、「山城の淀野」の「菖蒲」は葉が繁っており鳥羽田の「早苗」は今や取られているだろうかと思いやる内容になっている。したがって為家の和歌③①③②は、この光行の和歌を媒介にして、「山城の淀野」で「五月」という同時期に「菖蒲」を引き「早苗」を取るということを、「菖蒲」「早苗」という隣り合わせの題を使って表現しているのである。

③③うたたねの夢かとはかりたどられてうつつともなくあひみ

つるかな

(北野518初逢恋)

②④とどめば我やゆかむとやすらひて別れもやらぬ横雲の空

(北野525後朝)

和歌②④は、「北野社百首」の恋部で連続する「初逢恋」「後

朝」題で詠まれた和歌である。これらの典拠となつたのは、「文

選」巻十九の宋玉「高唐賦」の序に記されている話、いわゆる

「巫山の夢」「楚王の夢」「巫山の雲」などと言われる故事である。

「巫山の夢」という話は、楚の懷王が昼寝をした際に見た夢

の中で、神女が現れて「妾は巫山の女なり。高唐の客為り。君

の高唐に遊ぶを聞く。願はくは枕席を薦めん」と言い、王は神

女と同衾し、別れ際に「妾は巫山の陽、高丘の阻に在り。且に

朝雲と為り、暮に行雨と為る。朝朝暮暮、陽台の下にあり」と

言つて神女は去り、朝になつて王が巫山を見るとその通りにな

つていたというものである。そこで和歌②を見てみると、「うた

たねの夢」は「昼寝の夢」であることを示しており、「うつつと

もなく逢ひ見つる」として現実ともなく夢の逢瀬であつたとい

「初めて逢ふ恋」が詠まれている。つまり夢で神女と初めて逢瀬

を交わした楚王の心情と重なり合う内容になつている。そして

和歌③「夢か」「うつつ」と和歌④「我やゆかむ」という表現に

めてか」(古今集・恋三・六四五・読人不知、伊勢物語・六十九段)及び「君やこむ我やゆかむのいさよひに槿の板戸もささず寝にけり」(古今集・恋四・六九〇・読人不知)という和歌を暗示させることで、女の方から男のもとへ通つたこと——神女が自ら進んで楚王と関係を持ったことを表している。和歌④「別れもやらぬ横雲の空」とあるのは、「後朝」の別れに名残惜しく思う巫山の神女の姿であり、その雲を「とどめばや」とする楚王の心情が詠まれている。原典では楚王や神女の心情には触れられておらず、為家の和歌は踏み込んで詠んでいると言える。また、和歌④「横雲の空」は、同じく「巫山の夢」が踏まえられている定家の和歌「春の夜の夢の浮橋とだえて峰にわかるる横雲の空」(新古今集・春上・三八)に拠る表現である。つまり「横雲の空」を詠み入れることによつて「巫山の夢」を踏まえていることを示している。

以上見てきたように、和歌②④では連続する題の景物が同時に詠まれている漢詩句を利用し、和歌③④では連続する題の恋の進行状況に合う故事が選ばれ、いずれもそれら原典(漢籍)を踏まえた和歌を媒介にして、漢籍の世界を表現しようとして試みている。そして、このような二首に渡つての本説取りは、漢籍に限つたことではなく、物語撰取においても見られる。つまり、

堀河題の順序を利用した本説取りである。

おわりに

「七社百首」において本説となったものは、そのほとんどが撰取された前例があり、新たに開拓しようというような試みは見られない。換言すれば、中世和歌における漢籍撰取の時代的傾向による詠作であり、そういった表現を学んできた結果とも言える。その撰取の方法については、漢語を和訓にして詠み入れたもの、漢籍表現に万葉語も取り入れたもの、詩文全体の世界を踏まえたもの、連続する二首で一つの漢籍文の世界を表現したものなど、一般的な撰取方法から特殊な詠法まで様々な詠作が試みられていた。そして、撰取態度については原典だけではなくそれを撰取した和歌も踏まえており、見識の広さをも窺わせる。また、「伊勢社百首」の君徳に関する表現や、「石清水百首」の仏教用語の訓読語を詠み入れるなど、奉納先（神社）を意識した表現も漢籍影響歌の中でも見られた。

漢籍影響歌は各百首の全体に渡っており、百首歌を構成する一要素になっている。「俊成五社百首」の場合では「春日社百首」において漢籍影響歌（特殊な詠法）が意識的に詠み入れら

れていたが、「為家七社百首」の場合ではむしろ「春日社百首」には一番少なく、「北野社百首」に漢詩句を本説とする和歌が多い傾向にあり、その上、白詩（荒炭翁）の撰取や特殊な詠法（巫山の夢）の和歌も詠み入れられている。これは北野社の祭神が菅原道真であることが強く意識された結果であり、道真が白詩を好んで「菅家文章」「菅家後集」を編むほどに漢籍に精通していたということに関わっていると思われる。慈円勧進の「文集百首」（北野社奉納）において、白詩から選び出された詩句を句題にして和歌が詠まれたことと同じ理由と思われ、そこには神への法楽という意図があったと考えられるのである。

〔注〕

(1) 以下の和歌および「和漢朗詠集」「新撰朗詠集」の本文については「新編国歌大観」に拠り、和歌の末尾には新編国歌大観番号を付した。なお、「玉台新詠」は「玉台新詠集上」岩波書店・一九五三年、「文選」は「和刻本文選 第一巻〜三巻」（汲古書院・一九七四〜七五年）に拠り、「新釈漢文学系文選」（明治書院）を参照した。「菅家文章」は「日本古典文学大系」(岩波書店・一九六六年)、その他の漢文および訓読文は「新釈漢文学系」（明治書院）、「国訳漢文大成」「統国

訳漢文大成」(国民文庫刊行会)を参考としている。また、本稿での引用の際には、適宜漢字を当てたり訓点を省いたり、表記を改めた箇所がある。

(2) 『新訂増補国史大系 十二卷』(吉川弘文堂・一九六五年)に拠り、私に送り仮名を付したりや訓読を行ったりして表記を改めている。

(3) 『神社縁起』岩波書店・一九七五年

(4) 「東屋のひさしと聞けばいたづらに後のあふひになりぞしぬべき」(北野¹⁸菖)「ちはやぶる神の荒垣白妙にゆふかけわたす卯花の頃」(伊勢¹⁴⁸卯花)「筵田の鶴の毛衣万世のためしは君にしくものぞなき」(賀茂⁵⁸鶴)「遙かなる田中の井戸をたよりとて住むらん人の心をぞくむ」(春日⁶⁶²田家)

(5) 「伊勢社百首」恋部の連続する「旅恋」「思ひ」題に、「八橋の昔の跡の杜若同じ心に恋ひわたるかな」(伊勢⁵³³旅恋)「世とともに積もる思ひとしらせばや富士の高嶺の雪も煙も」(伊勢⁵⁴⁰思)とあり、「伊勢物語」九段「東下り」を想定して詠まれていることがわかる。

(6) 拙稿「俊成五社百首における漢籍の影響」(『和歌文学研究』第百八号・二〇一四年六月)